

二、通俗道德の二つの方向性

一 解放への回路と内縛の論理

そういうようなことを考え、いろんな問題を整理していきますと、私は民衆思想が、むしろ秩父事件が敗退していく過程においてどんな試練にあうかということ。その点が大事だと思えます。

それは先程いきましたように、圧倒的に暴徒が反道德的行為をした、世間の秩序を乱し、良俗を害し、さらに金銭の掠奪、放火など非道なことをやったという非難に示されます。そのような巻き返しのなキャンペーンが猛然と起こって、せつかく高揚した抵抗の思想を急速に萎縮させるような民衆レベルでのイデオログがたくさん出てきたということです。これに対しては、もちろん反撃もありますが、全体としては劣勢です。ではなぜ、こういう民衆の通俗道德が、いわば民衆自身をしぼる内縛の論理のようなものとして形骸化していったのだろうか。

通俗道德そのものについては、安丸良夫さんが『日本の近代化と民衆思想』という名著の中で、繰返し説いているのでそれを読んでください。要するに、民衆が天保前後からの激しい農村危機、飢餓情況、さらに幕藩体制による激しい収奪に抵抗して、彼らの生存を支えていくために自発的に選んだ自己規律の徳目、自力更生を説いた人生観なのであって、初期には変革のエネルギーに転じたものであった。今、一応その安丸さんの通俗道德の理解というものを踏まえて考えてみると、秩父事件の蜂起の過程でも、このエネルギーはたしかに変革の方向にある役割を果たしている。耕地オルグといって、数軒あるいは十数軒程度の共同体の中から、一人ないし二人のオルガナイザーが出ていますが、彼らが村民や部落の人を説得する時に、通俗道德の徳目を無視するようなかたちでは説得しておらないのです。

秩父困民党組織のトリオといわれる三人組についても、高岸善吉にしても落合寅市、坂本宗作にしても、これらの貧農のオルガナイザーは、通俗道德の上からいっても、うしろ指をさされるような人間ではなかった。「紺屋の善吉」とか「かじ屋の宗作」とかいわれるように、まじめな労働者であり、部落から表彰されるような養蚕経営者でもあった。大野苗吉なんかでも、剣術も使え農業も立派にやった立派な男だと尊敬されており、勤勉、節約、和合、誠実、それから指導力、そういったものを兼ねそなえた人物だと思われていた。また、石田造酒八という風布村の小隊長をやった農民もそうです。

この、秩父事件の中でのものとも輝かしい戦闘部隊の指導者になった石田造酒八の家に、僕は訪ね

て行きました。その家は、まるで奈良時代を思わせるような天地根元造りでして、僕は初めて見ましたけれども、かやぶき屋根があつていきなり土間に柱が突きささつていて、それだけの家です。そこに板ごしが敷いてある。そこに今でも遺族の老婆が暮している。聞くところによると、石田造酒八は通俗道德の鬼みたいな人で、もつとも模範的な農民だった。「韋駄天の造酒八」といわれ、山の上から下まで非常な速さで駆け降りて、鹿でもかなわなかつた。子供が、谷川に落ちて流されていった時に、彼は谷川の流れよりも速く走って救い上げたという伝説があるくらいです(笑)。



III-5 石田造酒八の遺族(風布村)

そういうような道德的に立派な人間が先頭に立つ、だから農民がついてくる。ということ、この情況では通俗道德が前向きに作用していた。したがって、通俗道德をもつともよく実践した人間というのは、もつとも忠実に実践したからこそ、反道德的な高利貸、人に嘘だらけの建前だけいつている役人、それから正面では法律だ法律だといいつつ、後にまわると賄賂を取り、博打、女遊びをする裁判所や郡役所の俗吏、警官たち、そういう者に対して、通俗道德の徹底的な実践者であり、純粹な人格者であればあるほど怒りを発するわけです。そうでしょう、民衆に対してだけまじめであれ、勤勉であれ、儉約しろ、税金をちゃんと納めろといひながら、自分たちは陰でみんな悪いこ

とをしている。高利貸にいたっては、利子制限の法律を破り、不当な重い利子を貪るではないかとこれは、通俗道德を相手側に投げ返すことによつて、逆に相手側の倫理性を撃つという発想方法になるわけです。そしてその過程を通じて、自分の方が相手よりも正しい、自分の方が正義で相手側は不正義である。したがつて不正義である相手を合法化するような法は、「法」であつても間違ひである。よつて悪法は乗り越えよ、というような論理的な展開がそこから汲み上げられてくるわけです。その時に、もし、こちらの側が不道德であつたなら、そういう論理的な筋の運びはむずかしくなる。この点を組織者たちは、おそらく言葉によつてではなく行動を通して理解し、農民たちを黙々と説得していったに違ひない。

だから私は、通俗道德というものは、ある民衆意識の状態が非常に高まっているとき、あるいは民衆の抱いてきた日頃の怨念が現状変革の方向へ高まつていったときには、これは民衆を内縛からも解放していく、そういう内在性を持つものであると思います。なぜならば通俗道德自体が発生した段階において、民衆の自力更生の人生観として生まれたという種をもっているから、それを共同体的承認の上で、敵に叩き返さすということを通じてボルテージを高めていけば、自分自身を解放する方向に出ていく力をもつのだ、と考えたいわけです。

それでは、通俗道德を通して解放へ向う条件として、それが逆に民衆自身を縛り上げ、しまひには二宮尊徳の銅像の前で、孫六さんみたいに毎朝礼をして学校へ行くような(笑)、そういう後退へ向う条件と、この二つの別れ目はどこから来たかということです。ここの所を、やはりメスを入れて確

める必要があるのではないかと思うのです。

ここでですね、通俗道徳の電圧、ボルテージが上がったとします。民衆の意識状況が高圧化した時に変革というのは起きやすいわけですが、そのような積極的な変革機能を持ちうるためには、ある一定の歴史的条件が必要だと思ふのです。その条件とは、いったい筋道として立てたらどういうことになるだろうか。つまり内縛の論理に化さない条件です。

そういうためには、まず第一に民衆一人ひとりが厳しい自己規律、自らの行動を自ら律する。それには共同体内において「個」というものが自覚されなければなりません。いかに個が大事かということとは次の例でもわかります。共同体から遊離した平塚らいちのような個の主張ではなく、共同体の中にあつて、その崩壊を食い止め、より強化する、共同体を戦闘組織に変える、そういうものを意識する主体としての、そういう個が強化されなければ闘いは前進しないわけです。つまり、民衆一人ひとりが自己否定をとまなうような自己規律の下に、自分自身の生活上の、それは通俗道徳をきびしく実践することによって、生活上の改善、努力というものを個人が達しようる限界まで頑張り抜いたあげくに、これほどやつてもなおかつわれわれは極貧の状態から出られない、これほどまで勤勉に、睡眠時間を詰めて働いても、なおかつ蟻のごとく私たちが地上に倒されていくのは何事であるかと、その限界に達した時、はじめてその通俗道徳を限界まで実践した個と客観的現実とのずれ、それがおかしいと疑られ、その違和感に気がつくんだと思います。

都際のみなさんからは、とろい（魯鈍）ではないか、桑原武夫先生の話聞けば、昼寝をしてでも

そんな事は分かるではないか、といわれるかも知れませんが（笑）、人民にはそんな声は届きません。人民が信ずる思想というのは、生活のレベルで、実感で確認できる思想であります。イデオロギーなどを信じようものならば、どれだけ人民が裏切られてきたか。これまで、すべての支配者のいう事は嘘であり、そのごもつともな理屈には全部裏があつた。それを信じた人民は必らず収奪され、ついには水牢に投げこまれた。だからお上のいうことは本音では信じない。そういう精神の情況が歴史的に創り出されていた。

そして二番目には、自分と対決するものに対する価値意識の転換をはかることです。自分に対立するものは、その通俗道徳という建前から見ても背反している、不正義ではないか。反道徳的高利貸を擁護する警察は間違つており、反道徳的な警察とぐるになつて高利貸を擁護する裁判所も間違つている。さらに、裁判所や警察を、軍隊を派遣してまでも擁護しようとする国家は正義ではないのだ、というようなかたちで、自分に対立する者に対し通俗道徳の原理を向うに突きつけることによつて、彼らこそ不正義であると自覚した時、通俗道徳は解放の方向に動き出す。通俗道徳は、というより、通俗道徳的な人生規範に負い目をもつてきた人民が、解放の方に向かつて動き出したといった方がよい。自分たちは、都の人と比べれば愚かで貧しい人間だと、そうみんな思っています。自分たちは、貧乏で貧乏だ、けれども、道徳的な劣等者ではないと。これは、貧乏人は結局、道徳的にも低劣だとしてきた偉い人たちの通説、なるほど彼らは賢い、そして金持で権力も持っている、だけれども断じて道徳的な優者ではない、むしろ金持で頭は良く権力はあるけれど、彼らは道徳的

には悪党であり卑劣な人間であるというこの自覚をもった時、民衆は自分を縛っていた社会的イデオロギーから自分を切り離す、あるいは剝離することができたのです。

さらに大事なことは、三番目として、そういつた自覚が自分一人の認識だけだったらだめなことです。ここが後で出てくる民衆論に関係してくることなのですが、みなさんのように市民社会の市民ではない（みなさんも市民社会の市民のような建前だけかも知れませんが）農民の場合は、自分一人の認識にとどまっていたら何ら行動に出られない。これが、今いったような共同体の中のメンバーの同意と確認を得て、しかもその共生のフィードバックの中で、連帯感の中で、思い定められた時ですね、つまりその自覚が自分一人の認識にとどまらず、共同体のメンバーとの同意と連帯感の中で確認された時、その認識は民衆の側での公的な正当性を獲得する。そしてこれがひとつの組織行動をともなつた時、これは正当性の獲得からさらに確信に転化し、行動にうつる準備を完了するわけです。

こういうことを考えてみますと、つまり民衆思想というのは、通俗道徳あるいは民衆道徳という自分自身の原理を、その建前いっぱいには拡張解釈し、その枠組みを乗り越えていくという段階に達しますと、通俗道徳は単なる内的規律というレベルから、対立者を打倒する外的志向性をもつた思想に転換するのです。

秩父困民党は、その思想をまさにみごとに打ち出したのです。しかしこの経験は論理化されず、秋の夜空に打ち上げられたひとつの火花の輝きのように、短時間で消えていってしまった。それを

継承する思想家が生まれなかつたし、継承する人民の闘いが続かなかつた。そのために、打ち上げられた強烈な人民思想の閃光は、わずかの空間を照らし出しただけで消え去ってしまったわけ。しかしそれは完全に消え去つたのではない。地下水ということばで語られるように、例えばあの九十九歳の老人がですね、その輝きを示す口説きを唄ってくれる。よくぞ明治、大正、昭和の三代を生き続けて、忘れずにそれを守り続けてくれたものという感動が私を打つわけです。

まあ、そういうふうには、通俗道徳が内縛の論理に化さず、解放の方向に出ていき、単なる内的な自己規律から外に向かつて社会を打倒し、敵を打倒していく思想に転換する可能性をもつていたことを、私たちはさまざまな民衆運動を通じて感じとつたわけです。

それに対して、通俗道徳が逆の内縛の論理に変化していくには、どういう要因があつたかといえ、これは先程いつたように、自分と対立する国家ないし権力に対して、自分が正義であり相手が不正義であるという自覚に達し得ない場合。つまり、そこまで達することができないような外的情況があり、それが強烈に作用している場合と、個人としてそういう自覚を持って、それが共同体のメンバー全員の間で連帯と承認を得られなかつた場合です。そうした場合は、彼は追い詰められ、切り捨てられます。その人間は共同体から脱落し、まあ木枯紋次郎とはいわなくても、ロンリーマンとなつて流れ歩くでしょう（笑）。

そして、こういう共同体の中で孤立に陥つた場合、民衆道徳は、むしろ先に自覚した人間を縛り上げる束縛の論理になつていく。だから今度は、通俗道徳の建前が逆に重圧になつて、ただ勤勉に

働け、節約しろという徳目実践の要求となり、民衆を解放するのではなく民衆を内側に萎縮させるような逆作用に働いてくる。こういう時は、もうどうにもならない内的な呪縛の歴史が始まるわけです。

このように、通俗道徳、民衆道徳の方向性が外に向かつての解放性ではなく、むしろ狭い自己規律というものになると、やがてそれが外在的な社会規範と化し、教育勅語など、上からのいろんな押し付け道徳とドッキングさせられるようになる。いわゆる社会イデオロギーというものが、とりわけ国家支配イデオロギーが民衆の中に浸透するというかたちになるわけです。つまり、民衆が自分の更生自立のために生み出した道徳目標が、いつのまにか、天皇制国家の体制を安泰にするための修身道徳のようなものに規範化されていってしまう。その時、民衆は国家のイデオロギーの中に捕えられてしまうというかたちになるわけです。

しかし民衆の内面生活の根底まで、心臓の奥まで、小地域共同体の内的運動までが天皇制に完全に握られてしまった、なんていうのは嘘っぱちです。そんな事はありません。しかし、思想の面では、天皇制イデオロギーが明治末期に広く民衆の底辺にまで浸透したということは否定できないし、それは今いったような、内的構造をもっていたのではないかと思うのです。

三、民衆ナシヨナリズムと国権

一 「権山節考」―幻想と怨念の果てに

かなり理屈っぽい話になりました。そこで少し話をほぐしていきたいと思えます。

私は、江戸時代から明治、大正、昭和の暗い時代を対象にずっと民衆史の研究をやっています、非常に悲しく思うのは、多くの人びと、われわれの父であり母である人びとが非常に長い間の抑圧と収奪、裏切り、そういう挫折の経験を繰り返し積み重ねていくうちに、非常に深い怨恨、怨念といますか、それと同時にあきらめの気持ちも蓄積してきているということです。これは、なまじつかの事ではないと思えます。とにかく日本では、縄文、弥生時代の終わりごろから始めて、民衆の受難史は二千年ぐらい続いたのです。それはもう、貧窮問答歌という万葉集の歌のことを思い出しても分かるほどですから。

民衆は常にしぼられ、だまされ、足蹴にされ、愚弄され、団結しようと思えば分断され、内部から切り崩される。一揆の指導者は、お前のいうことを聞いてやるというてはだまされ、一揆が収まればすぐ逮捕され、水牢に入れられたり、はりつけにされた。そういうような繰り返しを経験してきたわけです。江戸時代だけでも三千数百件という農民蜂起、農民騒擾が起きているほどですから、そういう歴史を積み重ねているうちに、民衆精神史の中には、これはもう十年や二十年の思想的工作用なんかでは除くことのできない、どつしりとした怨念と諦念、あきらめと恨みが堆積されているわけです。

しかし、私が怨念という場合、それには煮えたぎっている怨念と、冷却化し、凍結してしまった怨念との二種類あるということをお忘れないうでいただきたい。煮えたぎっている怨念というのは、まだ情念としての生命力がある。これは外に向かつて出ていく。すなわち、内に下に諦念に向かつてばかり行くのではなくて、上に向かつて噴出していくエネルギーをまだ持っている怨念です。ところが煮えたぎっている怨念も幾度かの挫折で潰され、洗われ、あるいは仲間から裏切られ、親族や家族からさえ悪口をいわれ、もうだめだというまで打ちのめされると、下へ内へと下降していき、凍結した怨念のようなものに転化していく。民衆の精神のレベルでいいますと、一番下の底の底部へはり付いたものといえます。

「楢山節考」というのをご存知でしょう、深沢七郎の小説で。その中でおりん婆さんが、姥捨て山である楢山に運ばれていくところがある。うすきみの悪いカラスが何百、何千羽と飛んでおり、

白骨が転がっている、雪が降ってくる。その荒涼たる地獄のような頂上まで、自分の息子かなんかにおぶって行ってもらおう。しかも、それを楽しみにしていたかのように早く楢山に連れていってくれと頼んでいた。そして楢山で餓死していくのです。進んで餓死することが、おりん婆さんにとつては救いである。こんな反人間的な話がありますか。それを深沢七郎は書いた。大当りですよ。なぜ大当りなんだろう、それは人間の、民衆の、ある精神構造の底を穿っているからです。

私が先程いったように、このおりん婆さんも、その生涯の中には何度か怨念のまだ煮えたぎっていた時期があったにちがいない。それが何度も何度も世間に裏切られ、飢餓に打ちのめされ、いろんなものに叩かれていたうちに、凍結した怨念になり、その怨念がいつの間にか、もうひとつの民衆精神の構造の対極のものに転化していつてゐるのです。

これを円形で書き表わしますと、一番底におりん婆さんのいる点があり、中間に通常の民衆があるとなります。すると、中間のあたりでは、おもしろいように願望と怨念とが燃え競っています。そして中間から底点にかけては、さまざま怨念、たとえば水俣病とか、イタイイタイ病とか、非業死を強いられたものに関わるさまざま怨念がうっ積してきます。ところがずっと下まではり付いてしまった、おりん婆さんのようなところまでくると、からつと逆に明るくなる。これは一体どういうことか。このぐるりと回る円周構造において、一番底のはり付いた部分と対極の所に、民衆はいつの間にか寓話を創っていた。

この民衆の底点での幻想を、私たちは軽視してはならない。その寓話とは、この世がこれほどま

でに哀れで、これほどまでに虚偽に満ち、これほどまでに悲惨である限り、あの世には必ず救いがある。あの世には私たちを救ってくれるものが必ずあるのだと。それは神であっても仏であってもいいのです。宗派によってもみな違う。民間宗教というものも馬鹿にしてはならぬ。ここはキリスト教の大学ですから、といって僕はキリスト教を誉めませんけれど、俺たちの宗教だけが世界宗教で高いんだなんてとんでもない話です。日本のキリスト教は、戦前ろくなことをしてこなかった(笑)。そこでですね、民間信仰の中にある負の極の絶対像、頂点といちばんどん詰まりの底点というのは、民衆思想の中では即自的統一の関係にある。常に円周運動をめぐらしている。そこまできかない、怨念が中ぶらりんの所で煮えたぎっている間は、民衆は暗いのです。おりん婆さんは、阿彌陀の世界、死の向こう岸に王道楽土がある、弥勒の世界がある、極楽浄土がある、そのことを信じている。これを誰が馬鹿にできようか、こういう精神構造を彼女に強いたのはいったい誰なんだ、こういう幻想にまで人間を追い詰めたのは誰か。その問題を抜きにして、阿彌陀とか弥勒だとか、そんなのは土俗信仰でナンセンスだと笑うことはできない。それは思いあがったモダニストたちの偏見である。民衆が、そこまで追い詰められたからこそ、彼らが最後の知恵を振り絞って、そういう絶対者を構想し、そこに自分の人生の最後の信をつないだわけ。深沢七郎はそれを直感でつかんでいる。だから、あのおりん婆さんの明るさを、くったくなく描いている。マルキストでは、ああは書けないですよ。悲惨であろう哀れであろう、と、マルキストは書くでしょう(笑)。そのことよって、民衆の精神の陰翳を取りこぼしてしまうのです。

二 「苦海浄土」——絶対への構築

もうひとつの例を引きましょうか。

作家石牟礼道子の名作、『苦海浄土』に出てくる坂上ゆきさんという人は、みなさん聞いたことがないかも知れません。水俣の病院に入院しており、もう激痛、苦悩そのもので、水俣病のもっとも重い病症です。七転八倒の苦しみをし、それが収まると悲惨な姿で廊下を歩いています。それはもう二眼と見られない。

ゆきさんは、もと水俣で漁師をしておった天草の漁民です。旦那は良い人で仲間も良かった。旦那と二人で、天の賜物である魚を捕って暮らすことが、この世での天国だった。ほかに何も欲しいものはない。これ以上の幸福があるだろうかといって喜んでいた人です。この人が水俣病に侵され、次第に手足がしびれて動けなくなり、とうとう後添いの旦那に月のものの世話までしてもらうようになった。旦那は必死になって看病した。ゆきさんは何度も希望をつないで、医師にすがろうとしたり、県の公害対策委員会や救済委員会にすがろうとしたが、結局だめだった。「お前は銭がほしいんだらう」とかいわれたりして、とうとう二度目の旦那からも見限られ、彼女は病院の一角に収容された。そして、私は解剖されるために生きてるんだと叫んでいたが、やがて、その怨念は底点にはり付いた。

その頃たまたま、水俣病の裁判があつて、厚生大臣が現地にあらわれ、病院にも行つたのです。坂上ゆきさんのいる重症患者の部屋にも。ところが、厚生大臣が入つてきたら、突如としてゆきさんが、「天皇陛下万歳」と叫んだのです。それから「君が代」とぎれとぎれの声で歌い慟哭した。もうみんな凝然とした。そしていたたまれなくなつた。私はその話を聞いた時、なんと悲しい心だ、ゆきさんはこの地上の救つてくれる人を、いつの間にか、天子幻想の中にまで描いていた。いいですか、その天皇というのは、今、現実に存在している、あのなんかおかしな天皇じゃないのですよ。坂上ゆきの中で構想された天皇というのは、もつと崇高なお上で、はるばる東京の方から私を救いにきてくれた現世の阿弥陀さんなのです。もちろん彼女の胸の中にあるそのお上はどういうものか分からない。彼女の小さい頃は、軍国少女のような年頃ですから、お上というのは天子様、天子様は日本の人民を一視同仁の眼で憐れんで下さる生き神様、その方が大臣を使いによこして私を助けに来てくださった、「天皇陛下万歳」「君が代は……」とこう自然と口を突いて出たのでしよう。さあ、詐欺師ども、大臣どもはびつくりしてしまつた。彼らは内心後日痛いですからね。まともに天皇陛下万歳、ありがとうございましたなんて挨拶されたら、いくら悪党どもでも自分の背中にしよつてきた罪業を感じないわけにいかないですよ、国家権力の罪業というものを(笑)。いたたまれなくなつて、逃げ出したというのです。

怨念が底点に凍結し、凍結した怨念になつた時には、彼女らは絶対的なものを構築する。その時、しばしば日本の歴史の伝統の中では、それが天子信仰になつたり、民間信仰の起爆になつたりする。

これは恐ろしいことですよ。人民ナシヨナリズム、民衆ナシヨナリズムというものも、そういうた対極構造からしばしば生まれているのです。これは水俣ではなくて、沖縄へ行つた時もそういういわれました。

三 「大和信仰」——もうひとつのナシヨナリズム

江戸時代に、薩摩藩のために長い間苛烈な支配を受けた沖縄の人民は、そのたびに足蹴にされ、ひどい収奪を受けてきました。したがつて、もう憎いのはただ薩摩です。ところが、沖縄の人びとには大和への信仰というのがあるんですよ、大和崇拜というのが。沖縄人民にしてみれば救いへの願望を遠隔地に、遠隔地にと、その極点を遠くに移乗していくという願望遠隔地移乗の法則性みたいなのが働いている。だから、鹿児島を抑えるのは大和だ、その中心は天下様と天子様。天下様、天子様というのは、鹿児島を擁する力を持っている。私たちの今の苦悩は、必ずや東方の、ずつと海の向こうの天子様が救つてくれる。

この大衆、民衆ナシヨナリズムは、ひめゆり部隊だとか、沖縄師範学校の鉄血部隊というかたちで、最後まで天子様のために、沖縄の南の端まで血に染めて抵抗して闘う。自分が一度も足を運んだことのない東京、そこに住んでいる、自分らをいつか必ず救ってくれる天子様に対する忠誠です。これを本土住民の忠君愛国的ナシヨナリズムと同質化し、同一視することができますか。日本

のナシヨナリズムは、このように絶えず二重構造であった。差別と逆説を内包していました。ひとつは国権的ナシヨナリズム、国権主義といわれるもので、これが上から天皇制イデオロギーになる過程で、水戸学だとか国学とかいような学問が利用された。

それとは全く違う次元のナシヨナリズムもある。これは民衆がどん底まで追い詰められた時に、自分を救ってくれる何か、それをもっと広い世界に、自分の村を越えたネーションという視野の中に無意識のうちに捜し出そうとした。あるものはミロクの世界であるかもしれないし、世直しの理想世かもしれない。しかし、それを現世化すれば、これはひとつのナシヨナルなものへの願望となり、天子信仰につながるものになるのである。これはですね、一応上からの国家主義的、天皇制的ナシヨナリズムとは異質のものであり、民衆が自分の社会的視野を村から県、県から国、国から世界というふうには、一歩々々広げていく過程の中でつかみとってきたひとつの共同幻想であり対外的意識なのですね。すなわち、解放を望む社会意識の発展したものが、あのような大衆ナシヨナリズムの核としてあるわけです。

でなければ、なぜそれほど差別されてきた沖縄の県民が、沖縄戦の最後まで徹底的に闘うことをしたか。あれは沖縄の郷土を守るといふ郷土愛のためだけではありません。沖縄の民衆の闘いを、帝国主義に踊らされた愚行だったなんていうやつは、もつての他だ、とんでもない話だ。沖縄の闘いは、アメリカの大部隊が、沖縄の郷土に襲いかかり、彼らを総奴隷化しようとして侵攻してきた時、水ぎわで徹底的に抗戦して守ろうという、郷土防衛の闘いが行われたと同時に、またそうする

事が、自分達をいつか救ってくれる母なる国への忠誠だという、非常に悲しい二重のヒューマニズム、ナシヨナリズムが沖縄の民衆の心のバネになっていたと思うのです。

だから、その期待を寄せていた日本に裏切られた時、沖縄の人びとの失望は大変なものだった。敗戦後、その自分が希望を託していた日本に裏切られ、天子にも裏切られたと知った時、沖縄の人びとは、もう日本に復帰しなくなっている、われわれはわれわれの沖縄で独立したいとい出したのは、その裏切りを受けた深さであり、沖縄の人が、なぜ皇太子をあんなに冷淡に遇したかも本土の人びとは分らないというのです。

そこにもですね、私は日本のナシヨナリズムの中で一番大きな問題がひそんでいると思う。幕末から始まって、御用学者やイデオログたちが、国家統一のために上から投げ網を掛けるようにして、ひとつの思想としてそれを構築し、下部に浸透させようとした。そういう矢印を持つナシヨナリズムと、もうひとつ、民衆が封建的支配から一歩々々出て、広い近代世界へ出ていく過程の中でどうにもならないかたちに追い詰められながらも、また同時に自分の力を拡大し、自分の解放の境域をひとつひとつ広くつかみ取っていくという中で創り出した社会意識、やがてそれがナシヨナルな国民としての連帯への意識に向っていった、下からの民衆ナシヨナリズムとがある。そして、この異質なものをごちゃごちゃにする、混乱させるといふのが、むしろ国家の狙いなのです。

われわれ思想史をやっている者の任務は、そのベタツとくっついてしまったものを剝離することです。切断するなんてことはできない、もし切断してしまつたら両方とも切ってしまう。ちょうど

気胸に空気がたまり、肋膜と肺がくっついてしまう病気があるでしょ、みなさんはそんなの知らないかもしれませんが、僕は且てそうなった。非常に呼吸が苦しくなるのです。しかし、お前は天皇制の皮膚と、民衆ナシヨナリズムの皮膚とがくっついてしまったから切断してやれと、メスでバスターと切られたら、両方とも死んでしまう。これはいいねいに剝離しなければならぬ。いろいろ凸凹があり、しかも内側にめり込んだり外側に張り出したりという複雑なかたちでくっついていて、ですから、これを剝離するのが、思想史をやる人の任務です。単に思想史をやる人だけではありません。少なくとも知的な仕事に携わろうとする人は、そういう任務があると私は思うのです。でなければ、何で肉体労働もしないでうまい物を食って生きてゆく権利がありますか。